主張

学び続け、成長し続けることの大切さ

上田真司

私ごとで恐縮ですが、校長職は七年目、新型コロナウイルス感染症が拡大する前の三年間は「信頼される学校づくり」を、その後は「一人一人が大切にされる学校づくり」をスクール・モットーに掲げ、職員と共に全力で取り組んできました。ここでは「教職員の育成」という視点で、この間の校長としての実践を振り返り、最終年である私自身の本年度の学校経営にも生かしたいと考え、筆を取らせていただきます。

教育公務員特例法が改正され、四月から「新たな教師の学びの姿」が制度化されることになりました。これが有効に機能するためには、学校組織のトップリーダーである校長の下での主体的・自律的な研修体制の充実を図り、教育の専門家として確かな力量を高めることが重要であることは言うまでもありません。教員に求められる資質の具体的内容として、五つの柱が示されましたが、中でも重要であると考えているのが「学習指導」です。そして、教員の「授業力」の向上を図るために実践し続けている取組が「授業交流」です。これは、研究の柱に基づいた授業を全教員が公開し、学年や教科の枠を超え、互いに学び合うものです。私自身も全ての授業を参観し、授業者と直接の意見交換の場を設け、具体的なアドバイスなどを行っています。これにより、ベテラン教員がもつ高い指導技術や、

若手教員がもつ優れたＩＣＴ活用能力などから、互いに多くの刺激を受け、日々の授業改善に生かすという授業力向上ＯＪＴとして、大きな役割を果たしています。

一方、予測困難な時代において必要とされる「新しいものを創り出す創造力」や「他者と協働しチームで問題解決する力」を育むことも重要だと考えます。本校では、ＳＤＧｓの実現に向けて「持続可能な開発のための教育（ＥＳＤ）」にも力を注ぎ始めたところです。その一環として、「多様性や利便性を兼ね備えた制服（ユニバーサル制服）」の導入を通して、ＳＤＧｓの基盤であるジェンダー平等の実現に迫ることとしました。導入にあたっては、職員とも時間をかけて話し合い「簡単な取組ではないからこそ、次の世代に先送りするのではなく、みんなで知恵を出し合い、真正面から取り組もう」という結論に至りました。この取組を通して「子供に対する愛情や責任感」「教師の仕事に対する使命感や誇り」といった情熱が、教職員一人一人にいっそう醸成されることを確信しています。

新たな感染症の発生や戦渦による国際情勢の不安定化など、予測困難な時代を迎え、中学校現場においても、不登校や特別な支援を要する子供への対応など、子供の抱える困難は多様化・複雑化し、教職員が対応に追われている現実があります。このような時だからこそ、校長が「挑戦する姿勢」をもち、ポストコロナを見据えながら、建前や前例にとらわれることなく、困難と思える取組にも、職員との合意形成を図りながら、積極的に実践を積み重ねていくことが肝要です。そのためには、校長自身が、絶えず学び続け、職員と共に成長し続けなければなりません。そして、生徒、保護者、教職員の一人一人の思いに寄り添った学校経営を日々実践していくことが大切であると考えています。

（全日中副会長・山梨県市川三郷町立市川中学校長）